京都大学新聞

学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
（761）2054 直通
（771）8111（内線2441）
振替・京都3909
（1部30円 1年間1,000円）

コンパの御相談承ります
旅館 きよす
寺町通今出川上ル
TEL
（231）5121
（231）5122

共闘機関の再生から

秋期闘争の突破口を

内乱鎮圧策動の粉砕を 共同戦線の前進へ

□＝関東大震災四十八周年の九月一日、都内で自衛隊を中心に警察団と三十万人の住民を巻きこんで災害出動訓練が行なわれ…□
□＝た。これに対し、関東大震災四十八周年・朝中人民友好親善集会弾劾・自衛隊の災害出動訓練・治安出動訓練粉砕を基調とする闘争…□
□＝が、沖縄返還協定国会批准阻止闘争を頂点とする冷秋期闘争の突破口として、請願流によって、東京・大阪をはじめ全国で…□
□＝たたかわれた。
□＝五月以来ドラスティックに進行している全国反戦・全国学生闘争合同外の戦線分岐は、沖縄闘争からすでに入管・反軍戦…□
□＝線にも波及して行り、東京では代々木公園に革命的反帝潮流、日比谷公園に中核派・第四インターを中心とするグループが…□
□＝結集して、それぞれ集会・デモを行なった。関西では、東京にならわれた二潮流以外に、北市民会館において蜂起・戦線派…□
□＝を中心とするグループが、府立労働会館には中国派が結集し、戦線の亀裂のさらなる進行をみせた。
□＝この日の請行動に対する機動隊の弾圧はきびしく、会場付近での無警別検問、装甲車の並進規制、デモの隊列の分断…□
□＝はせいなし二段とエスカレートされた。このような弾圧をはね返すのはもちろん、災害訓練にもかられるような破防法時代…□
□＝の到来に抗し、反帝国際主義派・革命的反帝潮流の、返還協定批准阻止・沖縄派兵阻止・七二年沖縄返還粉砕闘争にはけた…□
□＝飛躍が要請されているのであろう。

九月一日午後六時から、東京代々木公園B地区において、反戦青年委四世話人（寺田・浜口・早瀬西田）の呼びかけによる「九・一実行委」の主催で、解放派、反帝戦線・フロント・赤色戦線の四派を主軸とした「九・一関東大震災四八周年、全関東労学総決起集会」が約三千五百人の学生・労働者を結集して開催された。

この日の集会は、大震災キャンペーンを利用した「治安・防災訓練」策動を各地反実運動で対決し粉砕する中で、その成果を収約し反帝国際主義潮流の共同戦線の前進と冬秋沖縄一人管＝反軍闘争の突破口を切り開くものとして設定されたものである。

最初に、浜口世話人から今集会に向けた準備過程が報告され、更に集会の意義について「政府支配の治安＝内乱鎮圧策動に対する断固たる抗議」との粉砕のために今秋は、返還協定国会批准を中心に三里塚第二次強制代執行地取用・狭山裁判糾弾、エンタライズ闘争・政府支配階級の攻撃は実行委員会の主軸

党—軍—統一戦線の地平

プロレタリア革命の軍事問題

風巻ひろし

前回（八月三日号）、黒田氏は国際階級闘争の歴史的教訓を通じ、「党—軍—統一戦線（＝政府）はそれぞれプロレタリア独裁の構成要素として結合しており、かつ、党組織が全体系のすべてを掌握することによって解決されるのである」と述べ、さらに日本階級闘争の武装問題に触れるにあたって、日共の戦後史の総括を詳しく展開した。

今回は、まず67・10・8羽田闘争が切り開き、69・4・28沖縄闘争へとのぼりつめた日本階級闘争の歴史的地平を明らかにし、その総括と頂大安田攻防戦—神田カルチェ＝ラタンの性格の分析を試み、主要には共産同内部の分派—党派闘争の根源を示していく。そして、永野幸明論文（本紙四月二六日号、五月三日号）を「先進国革命主義、純粋プロレタリアート」と批判する立場から、「下層プロレタリアート」に依拠する武装闘争の戦略問題を、①非合法党の建設②政治＝軍事の二元的提起③非合法党の国際活動、と解答してゆく。

本論でこれらの日本階級闘争における党派闘争—国際党派闘争の主要な論点、一定解明になったと考えられる。編集部を中心に、このテーマをさらに豊かに展開することを約束しておきたい。（編集部）

〈下〉

3　今日の階級闘争の到達段階（続）

10・8羽田闘争が切り開いた地平は以下の通りである。

すでにのべて来た戦後革命の圧殺の上に立って、日本帝国主義はいわゆる戦後議会制民主主義支配をつくり上げた。この支配体制は六〇年安保、三池闘争の中で転換しはじめ、六五年日「韓」、ベトナム反戦闘争を経て、六七年に至ったのが、おおよそ次のような階級支配の様式であった。すなわち、国際的には米ソ平和共存による後進国民族解放戦争の圧殺、中国共産党と中華人民共和国に対する封じこめの上に立ち、日米同盟によって、軍事力を米帝に依存しながら、国内経済力に集中し、石炭・石油のエネルギー政策転換を含む高度成長を実現し、総評＝民同の階級的妥協を歴史的闘争の取り引きによって吸収する方法と合理化の取り引きによって取約することをカナメとして、農民に対しては、食管制度による農産政策、農産物価格支持政策を行なうことを賞与し、中小企業に対しても保護政策をとりながら、自民党の基盤を、農民、中小企業者の中に一定のつくり出し、総評＝民同に立脚した社共の市民的政治闘争を議会主義によって、軍事力を米帝に依存しながら、国内経済力に集中し、石炭・石油のエネルギー政策転換を含む高度成長を実現し、総評＝民同に立脚した金融寡頭制の強化、警察予備隊・保安隊・自衛隊としての帝国主義軍隊の育成強化、民間基幹産業部門における資本の集中の強化＝帝国主義的労働運動の育成は、この支配体制の中で確保されていったのである。六〇年における第二次安保条約の締結、貿易自由化、マクナマラ戦略による米帝のベトナム侵略革命戦争の本格的開始、六五年に日韓条約締結を経て、戦後属国制民主主義的支配体制の再編は、社共人民戦線を屈服させ、ならず押し進められ、六〇年安保闘争、三池闘争における進市民民主主義政治闘争の頂点としての全学連に対する日本階級闘争による政治闘争＝国会占拠、戦争闘争＝ボッパー占拠に至った戦後第二期階級闘争は、治安警察、機動隊の圧倒的強化による街頭デモの封じこめ、労働貴族の育成と職制支配の強化による「平和からの組合主義」によって切り崩されながら六七年を迎えたのである。

三派全学連、反戦青年委員会を担ったネオ三派は、六〇年以降の第一次共産同内分裂を結果し、相次ぐ内ゲバ、早大、慶応、明大闘争の中での右翼体育会のゲバルトの中でのゲバ闘争を準備したのである。10・8羽田闘争に対するゲバ棒、投石による治安警察機動隊の部分的粉砕、機動隊への対峙局面の形成は、日本帝国主義が戦後議会制民民主主義の支配体制の中で、社共人民戦線派を屈服させながら、押し進めてきた、アジア侵略、反革命の準備＝佐藤訪ベトナムの政治的意図を全面的暴露を通し、着々と進められてきた金融寡頭制支配の構築に対して蓄積された労働者人民の国家権力と資本家階級に対する憎しみと怒りをベトナム民族解放戦争との結合として与えたのである。つまり10・8羽田闘争は、六七年末に帝国主義国家権力と民戦線派と革命的左翼との間に形成されてきた政治的力関係を革命的左翼のゲバ棒闘争の著者によって打ち破ったことである。革命的左翼は、それまでの力関係を逆に利用しながら（例えば「大学の自治」、街頭デモの自由、その他の政治的民主主義）政治闘争を実力闘争として展開することによって、次々とその影響を拡大し、三派全学連、反戦青年委員会を中心として、従来の労働組合を中心とした市民的統一戦線（総評・全学連・原水禁）を再編していることに成功していったのである（いわゆる反帝・統一戦線）。

日本帝国主義はこの力関係の変化に見合って、支配体制を再編するのに六八年四月王子闘争から10・21新宿・防衛庁闘争までの間を要した。東大安田攻防戦—神田カルチェ＝ラタン闘争以降の全共闘運動の拡大を経て、引きずり出された反革命の性格、登り詰めた階級闘争の性格は、六九年四・二八闘争の頂点に達した。そしてこの闘いの敗北を総括して、六九年十一月安保決戦を転換点とする中期闘争の反政府闘争から政府打倒闘争への過渡期が開始されるのである。この階級闘争の到達段階の獲得は決して主観的なものではない。六九年四・二八闘争において「政府閣中枢占拠」を目標として、数万の労働者・学生が闘ったことは、明らかに日本階級闘争が反政府闘争の極限に到達したことを物語っている。この闘いを政府打倒闘争の開始＝六九年秋前段階闘争と主張した人々の誤りは明らかに霧ヶ関中枢占拠という政治目標に全共闘、反戦の労働者、学生が結集したのは、敵権力を破壊し、粉砕し、生産手段を奪取し、銀行を収奪するのではなく、「霧ヶ関中枢」を「占拠」しようとした点に特徴的であり、民主主義闘争、反政府闘争の極限的闘争であったということである。

4・28闘争における政防法四十条適用、機動隊による一日軍政は10—11月安保決戦においては、銀行、企業と治安警察の結合、日本共産党さえも利用した自警団の組織化・赤軍派潜入作戦、自衛隊の治安出動訓練、石油私兵のそれとの結合等々として更に拡大し、徹頭徹尾、生産手段を奪取し、銀行を収奪し、「霧ヶ関中枢」を「占拠」しようとした反革命として表現されたが、この反革命の性格は、反政府闘争の極限としての4・28—11月闘争に見合うものとして、自衛隊出動訓練、石油私兵の結合等々として更に拡大し、徹頭徹尾、生産手段を奪取し、銀行を収奪し、「霧ヶ関中枢」を「占拠」しようとした反革命として表現されたが、この反革命の性格は、反政府闘争の極限としての4・28—11月闘争に見合うものとして、自衛隊出動訓練、石油私兵の結合等々として更に拡大し、徹頭徹尾、生産手段を奪取し、銀行を収奪しようとするものとして、表現されたのである。

さて、以上に簡単に述べて来た日本階級闘争の到達段階、反政府闘争から政府打倒闘争の到達段階の到達点を踏まえて、当面する武装闘争の戦略問題に触れ、永野論文での「工藤の覚」建設について反論していきたい。

4　当面する武装闘争の戦略問題

永野氏は「プロレタリア的軍事路線は、二つの方向性によって推進される。つまり、階級闘争の暴力的発展とその自覚を背景にした「帝国主義軍隊解体」の「内軍闘争」と、「工場」を基盤とした「工藤の覚」である」と述べられ、「工藤」として、そこにおける闘いの階級的成熟の中で階級的闘争によって、どんなに日共が「国際主義組織」を語る組織的であろうと、合法党建設を至上命題とする限り、知らず知らずの基礎に立つ限り、党建設を制御され、綱領的観点を強められて、民族主義のうちに政治闘争を制御されて、「工藤の覚」の反軍闘争、及び「根拠地」としての「工藤の覚」建設について反論していきたい。

「プロレタリア的軍事路線は、二つの方向性によって推進される。つまり、階級闘争の暴力的発展とその自覚を背景にした「帝国主義軍隊解体」の「内軍闘争」と、「工場」を基盤とした「工藤の覚」である」と述べられ、「工藤」として、そこにおける闘いの階級的成熟の中で階級的闘争によって、どんなに日共が「国際主義組織」を語る組織的であろうと、合法党建設を至上命題とする限り、知らず知らずの基礎に立つ限り、党建設を制御され、綱領的観点を強められて、民族主義のうちに政治闘争を制御されて、「工藤の覚」の反軍闘争、及び「根拠地」としての「工藤の覚」建設について反論していきたい。

日本帝国主義国家権力の基盤は、この部分から形成されてきた日本資本主義の特殊性（天皇制、部落差別、沖縄差別、農業、中小企業問題など）、在日朝鮮人問題は日本労働者階級との結合は、非合法党建設を抜きにして絶対にありえないのである。警察の強化、機動隊の圧倒的強化による街頭デモの封じこめ、労働貴族の育成と職制支配の強化による「平和からの組合主義」によって切り崩されながら六七年を迎えたのである。

三派全学連、反戦青年委員会を担ったネオ三派は、六〇年以降の第一次共産同内分裂を結果し、相次ぐ内ゲバ、早大、慶応、明大闘争の中での右翼体育会のゲバルトの中でのゲバ闘争を準備したのである。10・8羽田闘争に対するゲバ棒、投石による治安警察機動隊の部分的粉砕、機動隊への対峙局面の形成は、日本帝国主義が戦後議会制民民主主義の支配体制の中で、社共人民戦線派を屈服させながら、押し進めてきた、アジア侵略、反革命の準備＝佐藤訪ベトナムの政治的意図を全面的暴露を通し、着々と進められてきた金融寡頭制支配の構築に対して蓄積された労働者人民の国家権力と資本家階級に対する憎しみと怒りをベトナム民族解放戦争との結合として与えたのである。つまり10・8羽田闘争は、六七年末に帝国主義国家権力と民戦線派と革命的左翼との間に形成されてきた政治的力関係を革命的左翼のゲバ棒闘争の著者によって打ち破ったことである。革命的左翼は、それまでの力関係を逆に利用しながら（例えば「大学の自治」、街頭デモの自由、その他の政治的民主主義）政治闘争を実力闘争として展開することによって、次々とその影響を拡大し、三派全学連、反戦青年委員会を中心として、従来の労働組合を中心とした市民的統一戦線（総評・全学連・原水禁）を再編していることに成功していったのである（いわゆる反帝・統一戦線）。

日本帝国主義はこの力関係の変化に見合って、支配体制を再編するのに六八年四月王子闘争から10・21新宿・防衛庁闘争までの間を要した。東大安田攻防戦—神田カルチェ＝ラタン闘争以降の全共闘運動の拡大を経て、引きずり出された反革命の性格、登り詰めた階級闘争の性格は、六九年四・二八闘争の頂点に達した。そしてこの闘いの敗北を総括して、六九年十一月安保決戦を転換点とする中期闘争の反政府闘争から政府打倒闘争への過渡期が開始されるのである。この階級闘争の到達段階の獲得は決して主観的なものではない。六九年四・二八闘争において「政府閣中枢占拠」を目標として、数万の労働者・学生が闘ったことは、明らかに日本階級闘争が反政府闘争の極限に到達したことを物語っている。この闘いを政府打倒闘争の開始＝六九年秋前段階闘争と主張した人々の誤りは明らかに霧ヶ関中枢占拠という政治目標に全共闘、反戦の労働者、学生が結集したのは、敵権力を破壊し、粉砕し、生産手段を奪取し、銀行を収奪するのではなく、「霧ヶ関中枢」を「占拠」しようとした点に特徴的であり、民主主義闘争、反政府闘争の極限的闘争であったということである。

4・28闘争における政防法四十条適用、機動隊による一日軍政は10—11月安保決戦においては、銀行、企業と治安警察の結合、日本共産党さえも利用した自警団の組織化・赤軍派潜入作戦、自衛隊の治安出動訓練、石油私兵のそれとの結合等々として更に拡大し、徹頭徹尾、生産手段を奪取し、銀行を収奪し、「霧ヶ関中枢」を「占拠」しようとした反革命として表現されたが、この反革命の性格は、反政府闘争の極限としての4・28—11月闘争に見合うものとして、自衛隊出動訓練、石油私兵の結合等々として更に拡大し、徹頭徹尾、生産手段を奪取し、銀行を収奪しようとするものとして、表現されたのである。

さて、以上に簡単に述べて来た日本階級闘争の到達段階、反政府闘争から政府打倒闘争の到達段階の到達点を踏まえて、当面する武装闘争の戦略問題に触れ、永野論文での「工藤の覚」建設について反論していきたい。

永野氏は「プロレタリア的軍事路線は、二つの方向性によって推進される。つまり、階級闘争の暴力的発展とその自覚を背景にした「帝国主義軍隊解体」の「内軍闘争」と、「工場」を基盤とした「工藤の覚」である」と述べられ、「工場」として、そこにおける闘いの階級的成熟の中で階級的闘争によって、どんなに日共が「国際主義組織」を語る組織的であろうと、合法党建設を至上命題とする限り、知らず知らずの基礎に立つ限り、党建設を制御され、綱領的観点を強められて、民族主義のうちに政治闘争を制御されて、「工藤の覚」の反軍闘争、及び「根拠地」としての「工藤の覚」建設について反論していきたい。

日本帝国主義国家権力の基盤は、この部分から形成されてきた日本資本主義の特殊性（天皇制、部落差別、沖縄差別、農業、中小企業問題など）、在日朝鮮人問題は日本労働者階級との結合は、非合法党建設を抜きにして絶対にありえないのである。警察の強化、機動隊の圧倒的強化による街頭デモの封じこめ、労働貴族の育成と職制支配の強化による「平和からの組合主義」によって切り崩されながら六七年を迎えたのである。

三派全学連、反戦青年委員会を担ったネオ三派は、六〇年以降の第一次共産同内分裂を結果し、相次ぐ内ゲバ、早大、慶応、明大闘争の中での右翼体育会のゲバルトの中でのゲバ闘争を準備したのである。10・8羽田闘争に対するゲバ棒、投石による治安警察機動隊の部分的粉砕、機動隊への対峙局面の形成は、日本帝国主義が戦後議会制民民主主義の支配体制の中で、社共人民戦線派を屈服させながら、押し進めてきた、アジア侵略、反革命の準備＝佐藤訪ベトナムの政治的意図を全面的暴露を通し、着々と進められてきた金融寡頭制支配の構築に対して蓄積された労働者人民の国家権力と資本家階級に対する憎しみと怒りをベトナム民族解放戦争との結合として与えたのである。つまり10・8羽田闘争は、六七年末に帝国主義国家権力と民戦線派と革命的左翼との間に形成されてきた政治的力関係を革命的左翼のゲバ棒闘争の著者によって打ち破ったことである。革命的左翼は、それまでの力関係を逆に利用しながら（例えば「大学の自治」、街頭デモの自由、その他の政治的民主主義）政治闘争を実力闘争として展開することによって、次々とその影響を拡大し、三派全学連、反戦青年委員会を中心として、従来の労働組合を中心とした市民的統一戦線（総評・全学連・原水禁）を再編していることに成功していったのである（いわゆる反帝・統一戦線）。

日本帝国主義はこの力関係の変化に見合って、支配体制を再編するのに六八年四月王子闘争から10・21新宿・防衛庁闘争までの間を要した。東大安田攻防戦—神田カルチェ＝ラタン闘争以降の全共闘運動の拡大を経て、引きずり出された反革命の性格、登り詰めた階級闘争の性格は、六九年四・二八闘争の頂点に達した。そしてこの闘いの敗北を総括して、六九年十一月安保決戦を転換点とする中期闘争の反政府闘争から政府打倒闘争への過渡期が開始されるのである。この階級闘争の到達段階の獲得は決して主観的なものではない。六九年四・二八闘争において「政府閣中枢占拠」を目標として、数万の労働者・学生が闘ったことは、明らかに日本階級闘争が反政府闘争の極限に到達したことを物語っている。この闘いを政府打倒闘争の開始＝六九年秋前段階闘争と主張した人々の誤りは明らかに霧ヶ関中枢占拠という政治目標に全共闘、反戦の労働者、学生が結集したのは、敵権力を破壊し、粉砕し、生産手段を奪取し、銀行を収奪するのではなく、「霧ヶ関中枢」を「占拠」しようとした点に特徴的であり、民主主義闘争、反政府闘争の極限的闘争であったということである。

4・28闘争における政防法四十条適用、機動隊による一日軍政は10—11月安保決戦においては、銀行、企業と治安警察の結合、日本共産党さえも利用した自警団の組織化・赤軍派潜入作戦、自衛隊の治安出動訓練、石油私兵のそれとの結合等々として更に拡大し、徹頭徹尾、生産手段を奪取し、銀行を収奪し、「霧ヶ関中枢」を「占拠」しようとした反革命として表現されたが、この反革命の性格は、反政府闘争の極限としての4・28—11月闘争に見合うものとして、自衛隊出動訓練、石油私兵の結合等々として更に拡大し、徹頭徹尾、生産手段を奪取し、銀行を収奪しようとするものとして、表現されたのである。

反政府から政府打倒へ

戦略としての非合法党建設

金融寡頭制支配の形成の中で

では、当面する日本階級闘争において武装闘争の戦略問題はどのように解答されなくてはならないのだろうか。第一は非合法党の建設である。六〇年代革命的左翼の革命を語っていたとうろこあり、六九年以降の反政府闘争の極限は、非合法党の党組織のつくりかたを行なわないことには、一歩も先に進めないことで、政治警察の圧倒的強化に対して規制されずにはならないことである。第二は非合法党の本来を持たねばならないことをリアルに突きつけているのである。第三は非合法党宣事問題に解答しつつ建設されねばならないことである。レーニン「全国政治新聞」を章除業務問題の現在では、金融的政治暴露は単なる政治宣伝の域を越えて、敵の倒し方まで含めて行なわれなくてはならず（いわゆる暴動）、政治＝軍事を一元的に提起しなければならない。10・8闘争の教訓のこれである。しかも日本帝国主義国家権力の性格が人民戦線派を屈服させ、実質不断に国際階級闘争のはねかえりが日本階級闘争を規定しているものであるから、人民戦線派において武装闘争の戦略問題はどのように解答されなくてはならないのだろうか。第一は非合法党の建設である。六〇年代革命的左翼の革命を語っていたとうろこあり、六九年以降の反政府闘争の極限は、非合法党の党組織のつくりかたを行なわないことには、一歩も先に進めないことで、政治警察の圧倒的強化に対して規制されずにはならないことである。第二